日蓮聖人の法華経観——道元禅師との比較を通して——

平井智親

はじめに

日蓮聖人は、『開目抄』に

此仏陀は三十成道より八十御入滅にいたるまで、五十年が間一代の聖教を説き給へり。一字一句皆真言なり。一文一偈妄語にあらず。(1)

と述べられ、釈尊一代の全ての経典を真実とされ、その上で、

但法華経計教主釈尊の正言也。(2)

と述べられる如く、その御生涯において『法華経』を最勝最高として弘教されたのである。

一方道元禅師も、『正法眼蔵』帰依仏法僧宝の巻において、

法華経は、諸仏如来一大事の因縁なり。大師釈尊所説の諸経のなかには、法華経これ大王なり、大師なり。余経・余法は、みなこれ法華経の臣民なり。眷属なり。法華経中の所説、これまことなり。余経中の所説、みな方便を帯せり、ほとけの本意にあらず。余経中の説をきたして、法華に比較したてまつらん、これ逆なるべし。法華の功徳力をかうぶらざれば、余経あるべからず。余経はなみ法華に帰投したてまつらんことをまつなり。(3)

と述べ、『法華経』を最高経典とみなしていたことが理解できる。

これ等の記述を一見すると同じようなことを二師は述べられているように思われるが、日蓮聖人は教相主義、道元禅師は観心主義と逆の評価もうけている。鎌倉時代という同時代に活躍し、ともに比叡山に学んで仏教思想の基礎を同じくすると考えられ、かつ今述べたごとく『法華経』を非常に重視した両祖ではあるが、その御生

涯においては、日蓮聖人は『法華経』至上、道元禅師は禅とかなり相違した道をあゆまれた。

本稿においては、日蓮聖人がその御生涯をかけた『法華経』をどのようにみられていたのかということを、道元禅師の法華経観との比較を通して考えてみたい。

この両祖の法華経観について北川前肇氏は、

日蓮聖人が法華経を釈尊と一体とみなして渇仰帰依されるのに対して、道元は経典をあくまで自己が生死を離脱するうえでの理法であり、真理が語られているという意味で、経典をとらえている。(4)

と両祖の法華経観の違いを指摘されている。

このような相違について、本稿では、『法華経』方便品の「唯仏与仏」という言葉に注目して述べてみたいと思う。というのは、両祖ともに『法華経』引用において方便品が一番多く、特に道元禅師の『正法眼蔵』九十八篇(5)中三十九篇の『法華経』引用において「唯仏与仏」という言葉の引用が十五篇と最も多くみられるからである。

一

日蓮聖人遺文における「唯仏与仏」の引用は同じような形である。代表的なものをあげれば、

①法華経の正宗略開三広開三の御時、唯仏与仏乃能究盡諸法実相等、世尊法久後等、正直捨方便等、多宝仏迹門八品を指て皆是真実と証明せられしに何事をか隠べき。なれども久遠寿量をば秘せさせ給て、我始坐二道場一観レ樹亦経行等云云。最第一の大不思議なり。

『開目抄』(6)

②今の施主十三年の間、毎朝読誦せらるる自我偈の功徳は唯仏与仏乃能究盡なるべし。

『法蓮鈔』(7)

③龍樹菩薩大論云九十三也今言二漏盡阿羅漢還作仏一唯仏能知。論議者正可レ論二其事一。不レ能二測知一。是故不レ応二戯論一。若求二得仏一時　乃能了知。餘人可レ信。而未レ可レ知等云云。此釈爾前別教十一品断無明圓教四十一品断無明大菩薩普賢・文殊等未レ知二法華経意一。何況蔵・通二教三乗。何況末代凡夫云論文也。以レ之案法華経唯仏与仏乃能究盡者爾前灰身滅智二乗押二煩悩業苦三道一　説二法身般若解脱一二乗還作仏。

菩薩凡夫亦レ如是釈也。故天台云　二乗根敗名レ之為レ毒。今経得レ記即是變レ毒為レ薬。論云　餘経非二秘密一　法華是秘密等云云。

『始聞仏乗義』(8)

④抑法華経と申御経は一代聖教には似るべくもなき御経にて、而も唯仏与仏と説れて、仏と仏とのみこそしろしめされて、等覺已下乃至凡夫は叶はぬ事に候へ。されば龍樹菩薩の大論には、仏已下はただ信じて仏になるべしと見て候。

『上野殿母尼御前御返事』(9)

以上をみてみると、①は迹門における重要思想としてあげて、それにより本門の重要性を強調している。つまり、『法華経』によって『法華経』を価値づけているといえるのではないだろうか。②は、読誦、特に自我偈の功徳を解説するのに使われて、『法華経』の思想に関連して引用されている。③は、重要な『法華経』の思想である二乗作仏の文証として引用され、④もまた同様である。「唯仏与仏」に関し日蓮聖人遺文において真蹟が残っているもの、曽存または断簡が残っているものは、この他に『八宗違目鈔』(10)があるが、これは引用中の引用である。つまり、確実なものに限れば、日蓮聖人の「唯仏与仏」の引用は、全て『法華経』の思想に関連があるといえる。

一方道元禅師の引用は、二つのタイプに分けられる。代表的なものをあげれば、

⑤しかあれども、雪峯そのちからあり、その人なるによりて、すなはち庵主のかみをそる。まことにこれ雪峯と庵主と、唯仏与仏にあらずよりは、かくのごとくならじ。一仏二仏にあらずよりは、かくのごとくならじ。龍と龍とにあらずよりは、かくのごとくならじ。

『道得』(11)

⑥一者聲聞乗。

四諦によりて得道す。四諦といふは、苦諦・集諦・滅諦・道諦なり。これをきき、これを修行するに、生老病死を度脱し、般涅槃を究竟す。この四諦を修行するに、苦・集は俗なり、滅・道は第一義なりといふは、論師の見解なり。もし仏法によりて修行するがごときは、四諦ともに唯仏与仏なり、四諦

ともに法住法位なり。

『仏教』(12)

⑦このゆゑに、唯以一乗、為一大事として出現せるなり。この出現、すなはち一大事なるがゆゑに、唯仏与仏、乃能究盡、諸法実相とあるなり。

『法華転法華』(13)

⑧仏法は、人の知るべきにはあらず。この故に昔しより、凡夫として仏法を悟るなし、二乗として仏法をきはむるなし。獨り仏にさとらるる故に、唯仏与仏、乃能究盡と云ふ。

『唯仏与仏』(14)

⑤は、『法華経』の経説に関係なく単に雪峯も庵主も覚者であったことを表現するために「唯仏与仏」という言葉が使われたにすぎない。⑥も⑤同様『法華経』の思想と関連しているとは少し言い難い。⑦は『法華経』の思想を『法華経』で考えている。⑧は③④同様に二乗作仏について述べるのに引用している。その他の「唯仏与仏」の引用については、⑦⑧のように『法華経』の思想に関連があるものが一つあり、それ以外は⑤⑥のようなタイプの引用である。

「唯仏与仏」の引用についてごく簡単にみてきた。日蓮聖人の引用は、全て『法華経』の思想に関連があるものであり、道元禅師の場合は、『法華経』の思想に関連があるものもあるが、それよりもむしろ『法華経』の思想に関連性が希薄な引用の仕方が多いということが言えるかと思われる。

二

何故このような違いがでてくるのであろうか。それは、日蓮聖人が『四条金吾殿御返事』に、

釈迦仏と法華経の文字とはかはれども、心は一也。然ば法華経の文字を拝見せさせ給は、生身の釈迦如来にあひ進らせたりとおぼしめすべし。(15)

と述べられている通り、『法華経』を釈尊と一体とみなし、一一文文是仏とするからである。これに対し道元禅師は、『道元和尚広録』第七永平禅寺語録に、

仏法之中有二法華・華厳等一、非三法華・華厳等各各之中有二各各之仏法一也。然則法華・華厳等八万四千法蔵、悉是仏祖単伝也。非三法華・華厳等外別有二祖

師道一也。(16)

と述べられている通り、釈尊一人が説いた一つの仏法があるのであって、『法華経』『華厳経』それぞれに別々の仏法があるのではないと考えられているのである。

このように考えてくると、北川前肇氏が述べられているように、日蓮聖人は、『法華経』を釈尊と一体視され、経文通りの意味で引用されている。道元禅師は、経文は単に真理が語られているというような形でとらえられ、経文それ自体には価値を見出さず、それ故か経文を自由に引用されていたことが理解できるのではないかと思われる。

むすびにかえて

以上日蓮聖人の法華経観についてみてきた。道元禅師との比較を通して理解できた事は、日蓮聖人は、「唯仏与仏」の引用において、『法華経』の説く思想と関連させながら引用され、それから『法華経』を釈尊と一体視されていたことが理解できた。これに対し道元禅師は、「唯仏与仏」の引用において、『法華経』の説く思想と関連させながら引用されるだけでなく、むしろその関連性の薄い引用の仕方をされる場合が多かった。このことから、単に真理が語られるという意味において経典をとらえていることが理解できた。

同時代に活躍し、仏教思想の基礎を同じくすると考えられ、しかも双方『法華経』を重視していたにもかかわらず、その両祖の経典のとらえかたには大きな隔たりがあったといえるのではないかと思われる。

註

(1)『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定遺』と略す)五三八頁
(2)『定遺』五三九頁
(3)大久保道舟編『道元禅師全集』上巻(以下『全集』上と略す)六六九頁
(4)北川前肇著『日蓮教学研究』八四頁
(5)『全集』上所収
(6)『定遺』五五一頁
(7)『定遺』九四九頁
(8)『定遺』一四五四—五頁
(9)『定遺』一八一〇頁
(10)『定遺』五二七頁
(11)『全集』上三〇五頁
(12)『全集』上三一〇頁
(13)『全集』上七六九頁

(14)『全集』上七八〇頁
(15)『定遺』六六六頁
(16)『全集』下一二九頁